慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	史觀(第一册)(早稻田大學文學部編)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.1 (1932. 3) ,p.141- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19320300-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の考定した新順位に依つて排列されてをる。世界的に活躍した蒙古兵の風貌その隊形、武器、軍船等を精緻に書き傳へた本繪卷が、世界の寶物であることは云ふまでもない。評者は、パリの國民圖書館の東洋展覽會に陳列されたラシッド・ウッジンの蒙古史中蒙古人バグダット攻略の繪（一三一五年項のもの）を見たが、その幼稚なる到底我竹崎季長のそれに及ばない。此ユニックな歴史的記念物とも云ふべき圖卷を復刻された博士及び東洋文庫の學績に對しては吾人は衷心より感謝しなければならぬ。同文庫は頃日來我國東洋史の名篇を歐文に譯して外國に紹介されてをる。ねがはくば此「元寇の新研究」も繪詞の解説と共に歐文になほして世界の學者に紹介していたゞきたいものである。西域邊土の地名の研究も重要ではあるが外國學者にとりては本書の如き著書の出現を本邦學界に久しく待望してをつたのである。（松本信廣）

史觀（第一冊）（早稲田大學文學部編）

最近各大學が相踵いで史學に關する研究雜誌を發行し、史學界は頗る活氣を呈するに到つたが、此の時期に當つて早稲田大學の史學科から「史觀」の刊行された事は眞に學界の慶事といふべきである。

先づ開卷第一に浮田和民教授の「史學管見」なる論文があり、第二には野々村戒三教授の「歴史事實に關する私見」なる論文がある。共に史學の理論を扱つたもので、前者は歴史の本質と史學者の任務とその資格などに就て述べ、後者は史學の科學的研究に據るべきものなること及び史料の性質如何によつて史實の可信程度に相違あることを論じてゐる。

西洋史に關するものには中西敬次郎氏の「希伯來の聖數に就て」、小林正之氏の「宗教改革前獨逸の精神界に關する諸説」、小島幸治氏の「現代ロシアの國史研究とその問題」がある。中西氏は舊約聖書中に散見する三・四・七等の數が聖數として特殊な意味を有するに至つた理由を心理學及至歴史の立場から考察し、小林氏はパウル・ヴンダーリヒの論文によつて獨逸諸大家の宗教改革前の時代に關する批判を紹介してゐるが、ヴンダーリッヒの批判の價値は兎も角、宗教改革研究者に便利なビブリオグラフイーを提供したものとして貴重である。小島氏はレニン大學教授カレエフ氏の論文を La Revue Historique から飜譯して現代ロシアの史學界の狀況を紹介してゐる。

東洋史に關するものは清水泰次氏の「明代の宦官」と出石誠彦氏の「支那古代史研究の趨勢と説話考察の意義」とである。前者は明代の宦官の勢力が時代の進展と共に增長せる次第を論じ、後者は支那古代史研究の各方面を紹介し、氏の企圖せらるゝ説話考察による古代史研究の意義を强調してゐる。

國史に關するものには「日蘭交通の起源」と題する京口元吉氏の論文と「我國石器時代人の食料」と題する池上啓介氏の論文とがある。京口氏は蘭船リーフデ號が全く偶然の事實に依つて來航せることを明らかにし、同船に英人の乘組みたる理由を考察してゐるが、考證であるから無用な形容詞を省略し、全體としても少し簡潔に論じ去られたら如何であらうか。池上氏は石器時代の遺

蹟や遺物に依つて當時の食料を考察し、原始經濟生活の一斑を示してゐる。

此の他、平竹傳三氏の「オロチイ族の研究」は同種族の人口・物質生活・社會組織・宗教などを知るべき史料で、ロシア語を丹念に飜譯された努力に敬意を表すべきである。最後の定金右源二教授の「イラークの旅」はメソポタミヤの旅行記で該地方の古代文化に對する回顧とその地方の現況とが流暢な文に綴られてゐる。

右は内容の紹介であるが、大家の論文の少ないのが第一册であるだけに物足りない。また論文集の形式で編輯されてゐるので史科的のものが少しく不調和である。然し新進學者の旺盛なる學究的精神が溢れてゐて第二册第三册へと期待をつなぐ。以上簡單なる紹介を以て發刊の祝辭に代へ、尙ほ將來の發展を祈る次第である。（有賀春雄）

Matveev, Z. N. Istorija Dal'nevostochnogo Kraia. 1929

本書「極東地方史」は、國立極東大學東洋史學科の教授であるゼ・エヌ・マトヴエフ氏が一昨年のロシヤ地理學協會ヴラディイヴオストツク部の紀要に發表された論文である。

氏は東洋史（主として極東地方）を考古學的見地より研究し、今日迄に公にされし論文には非常に有益なものがあるが、それ等については他日詳しく紹介させて頂くことゝして、玆には本論文の内容について少しく述べてみやう。氏は本論を左記の如くに分けて居る。

一、極東地方史、序論。二、後貝加爾地方に於ける古人種の遺跡。三、極東地方史に關する古文書。四、極東地方小史。五、極東地方の殖民。六、革命當時に於ける極東地方（一九一七—一九二二）。七、重要書目。

以上の項目の内、最初の、極東地方史序論を見ると、最近ロシヤに於ける極東考古學の概況を知ることが出來るので、こゝに、その一部分を抄譯してみやう。

『當時この地方に居住して居た人種の頭骨は扁平である、乍然バイカル湖及びそれより北方にかけて發掘される頭骨は長圓形で當時の彼等は金、銀、銅等を使用して居たのである。これについてはエフ・エフ・ブッセ氏が十九世紀の後半より極東地方に於ける考古學的材料の蒐集に努力せられ（主としてウスリー地方について）、一八八八年にアムール地方研究學會紀要中に研究論文を發表して居る。その後エル・ア・クラポトチン氏が一九〇八年に同紀要中にブッセ氏より稍々詳細に論じて居り、氏の研究は單にウスリー地方のみならずアムール、サガレンにまで及んで居る。沿海州地方についてはヴエ・カ・アルセニエフ氏が「考古學」（一九一六年）の中で詳細に述べて居る。アムール地方に於て發見された遺物を擧ぐれば、セレムヂ河口及びブラゴヴエシチエンスク附近より數多のものを發見して居る内でパクロフスキー町及びノヴオミカイロフスキー村附近よりは、石器、貨幣等が發掘されて居り、この他青銅の遺物が多く發見されて居る。モスコヴイテイルスキー、トムの兩河岸よりは壘堡壕等